

A・E・ファン・ニーケルク著

『ラテン・アメリカの  
ポピュリズムと政治発展』A. E. van Niekerk, *Populism and Political Development in Latin America*, Rotterdam, Rotterdam University Press, 1974, 230 p.

## I

ラテン・アメリカの政治・政治史の研究においては、他の発展途上地域の研究の場合と同様に、実証的・個別的アプローチを志向する研究者と理論的考察に主眼をおく研究者とが方法的に対立している。この対立はしかし、ラテン・アメリカ研究の場合には他地域（たとえばアジア）の研究ほど深刻ではないように思われる。それはラテン・アメリカの諸国間にはアジアとは比較にならないほどの高い同質性が存在し、一般化・理論化を可能とする素地が多分に備わっているからである（注1）。とはいえ、ラテン・アメリカ諸国の間にも同質性にまさるとも劣らぬ異質性の存することは否定できず、これが個別的アプローチを支える重要な根拠となってきたのであった。本書のテーマをなす「ラテン・アメリカのポピュリズム」も域内の同質性と異質性とが複雑に交錯した運動の一例といってよいであろう。というのは、ラテン・アメリカにはペルーのアプリスモ（Aprismo）をはじめ、ブラジルのヴァルギスモ（Varguismo）やアルゼンチンのペロニスモ（Peronismo）などのようにポピュリズムと俗称されるさまざまな運動が生起しているが、これらの運動の間には共通性ととも相違点も多数認められるからである。ここからラテン・アメリカのポピュリズムの研究は方法的には、同質性に着目して一般化を旨とする理論的アプローチと、異質性を重視する個別的アプローチとに分岐することになるが、今日までの所は個別研究が圧倒的に多く、一般化の試みはきわめて乏しかった（注2）。

こうした研究状況のなかで現代政治学を分析ツールとしてラテン・アメリカのポピュリズムの一般化を企図したのが本書であり、しかもそこでは従来の実証的研究の成果が積極的に摂取されている。その意味で本書は、上に述べた二つのアプローチの架橋をはかった意欲的な研究とも見なせよう。もっとも本書の主眼が理論的解明におかれているために実証面での弱さは否めないが、本

書に提示されている分析枠は今後の個別研究にも役立つと思われるので、以下その内容を簡単に紹介してみた。なお著者のニーケルクはオランダの政治学者で、現職はアムステルダム大学のラテン・アメリカ研究・情報センターの講師である。

（注1）たとえば Dore, R. P., "Latin America and Japan Compared," in *Continuity and Change in Latin America*, ed. John J. Johnson, Stanford Calif., Stanford University Press, 1964, pp. 228—229.

（注2）ラテン・アメリカのポピュリズムの一般化の試みとしては、Di Tella, Torcuato S., "Populism and Reform in Latin America," in *Obstacles to Change in Latin America*, ed. Claudio Véliz, London, Oxford University Press, 1965 および, Hennessey, Alistair, "Latin America," in *Populism: its National Characteristics*, ed. Ghita Ionescu and Ernest Gellner, London, Weindenfeld and Nicolson, 1969などがある。

## II

上述したように本書は現代政治学の立場からラテン・アメリカのポピュリズムの解明を試みたものであるが、とくにポピュリズムの政治的機能の分析がその中心的テーマをなしている。より具体的にいえば、本書は主として次の2問題を解明することから成り立っている。(1)ラテン・アメリカのポピュリズムはポピュリスティックとして知られる他の発展途上諸国の「動員体系」と、あるいは先進工業国にかつて存在したポピュリスティックな運動と等しいものなのか。(2)ポピュリズムはラテン・アメリカの政治発展に固有な機能を果たしているのか。果たしているとすればその機能とは何なのか。そしてこの2問題に答えるべく、本書は以下のような内容で構成されている。

## 第1部 政治体系の比較

- 1 発展と動員, ラテン・アメリカのケース
  - 2 ポピュリズムと政治的近代化
- 第2部 各国のポピュリズム
- 3 ブラジル
  - 4 ベネズエラ
  - 5 ボリビア
  - 6 コロンビア
  - 7 ペルー

## 8 アルゼンチン

## 第3部 社会変動とポピュリズム

## 9 ポピュリズムと統合

## 10 ポピュリズム、参加および政治発展

この内容構成について若干敷衍すると、第1部では他地域の運動との比較を通じてラテン・アメリカのポピュリズムの性格が明らかにされる。第2部では上記6カ国のポピュリズムの実証的分析がなされ、それぞれのポピュリズムの間に存在する類似性と相違点が明らかにされる。第3部では、第2部の分析を通じて帰納的に明らかにされたポピュリズムの性格が、地域の政治発展といかに関連するかが追求されている。以下、逐次その内容を見てみよう。

他地域のポピュリズムとの比較を主要テーマとする第1部は、他の発展途上地域との比較を試みた第1章と、先進国の過去のポピュリズムと比較した第2章とに分かれる。第1章では、同じ第3世界に属するとはいえ、アジア・アフリカとラテン・アメリカとが政治的に異質であることが強調される。たとえばラテン・アメリカの政治文化は西欧的であり、軍隊の政治介入、暴力等々があるにせよ、基本的には議会制民主主義の理念が定着している。政治的動員のパターンも、アジア・アフリカの新興国では、国家統一の必要から強制を伴うこと——エドワード・アプター (David E. Apter) のいう「動員体系」——が少なくないが、ラテン・アメリカではこの種の政治的動員を必要としない。19世紀初葉に独立を達成したラテン・アメリカでは国家の権威が確立され、国家の正当性が疑問視されることはないからである。またラテン・アメリカは社会的・経済的にアジア・アフリカよりも数段進んでおり、国民は社会的に動員されている。ただし、ラテン・アメリカに残存する半封建的な社会・経済構造のゆえに、アプターが民主的な政治的動員の理念型として提示した「協和体系」レコンシリエーション・システム (注1)がこの地域ではまだ達成されるに至っていない。このためラテン・アメリカのポピュリズムは「社会的に動員された人口グループの政治化を目ざす」(p. 19) ことになり、国民を社会的に動員するという責務を帯びたアジア・アフリカの中央集権的動員政党とは、その機能を異にしている。また伝統的構造を主体的に変革しようとはせずに社会的に動員された国民を政治化することのみをその機能としているがゆえに、ラテン・アメリカのポピュリズムには革命的性格が稀薄である。

このようにラテン・アメリカのポピュリズムの機能を

明らかにした後に第2章では、アメリカ、ロシア、アフリカのポピュリズムとの比較を試みている。その際比較の変数としては、(1)社会変動、(2)成層化条件と補充、(3)イデオロギー的目標、(4)リーダーシップと組織、が選ばれているが、従来ともすれば全く異質と見なされてきた先進国の過去のポピュリズムと現在のラテン・アメリカのそれとの間に少なからぬ共通性があるとする本書の指摘は評者には大変興味深く思われた。たとえば、いずれのポピュリズムも激しい社会変動を背景に生まれ、近代的価値と伝統的価値とを統合しようとする性格のあること。そのイデオロギーは単純・素朴で、社会主義・自由主義に比し洗練されておらず、外国資本などの見えざる勢力が無知の大衆を支配しているといった類の力陰謀説の域を脱していないこと。組織として脆弱であること等等。しかしながら、こうした類似性があるとはいえ、ラテン・アメリカのポピュリズムが、他のポピュリズムに比し多くの相違点を持つことは著者も認めている。すなわち、近代化と伝統とを調和させようとする性格はすべてのポピュリズムに見られるが、かかる折衷的性格、換言すれば「新伝統主義的」性格はラテン・アメリカにおいて最も顕著であり、また支持層が農民のみならず多数の階層に及んでいることも、ラテン・アメリカのポピュリズムの著しい特色である。運動のリーダーの出身階層と支持者の社会層が異なり、リーダーが下位階層を操作するという意味での操作性もラテン・アメリカのポピュリズムに強く認められる。要するに、若干の類似性はあるが、ラテン・アメリカのポピュリズムは他地域のそれと比べ多くの相違点を有しているのであり、したがって本書の提起した第1の問題、すなわちラテン・アメリカのポピュリズムと他地域のそれとの同一性の問題、に対しては否定的な答が与えられることになる(なお、pp. 34~41に他地域と比較したラテン・アメリカのポピュリズムの特質が一覧表にまとめられている)。

(注1) 訳語は Apter, 内山秀夫訳『近代化の政治学』上下 未来社 1968年によった。

## III

では、第2の問題、すなわちラテン・アメリカのポピュリズムは固有な機能を果たしているのか、に対してはいかなる答が与えられるべきなのか。この問題に入る前に本書の第2部では、ラテン・アメリカ6カ国のポピュリズムについて、その歴史的背景、支持基盤、イデオロギー的目標、政治組織、リーダーシップのパターン、

国家発展への貢献等々が実証的に分析されている。限られたスペースのなかに6カ国も扱っているため、個々のポピュリズムに関する記述は、舌足らずの感を否めないが、ポピュリズムの勃興がその後の国の政治過程にいかなる影響を与えたか、についての分析は、従来比較的触れられなかった問題だけに、興味深い指摘を含んでいる。たとえばブラジルのヴァルギスモは、国民多数の政治参加を実現してそれ以前の寡頭支配体制に修正を加えたが、寡頭勢力そのものを政治から排除することはなかった。この結果、ヴァルガス (Getulio Vargas) 以後も、議会が寡頭勢力の利益を代弁する場となり、ポピュリスティックな行政府と対立して二重権力状況が現出した。1964年に始まる軍政は議会の権限を削減し政党を再編成したが、それは「ポピュリズムによって惹起された二重権力状況とドラスティックに断絶することを企図していた」(p. 59)として、ヴァルギスモと今日の軍政との歴史的関連性を明らかにしている。他の諸国についても、ポピュリズムが個々の国の政治過程に少なからぬ影響を与えたことが具体例をもって示されているが、第2部の実証分析を通じて城内のポピュリズムにはほぼ次のような共通性のあることを著者は指摘している。(1)ポピュリズムは1930年頃の社会変動を歴史的背景として持つ、(2)支持層が多様である、(3)運動のイデオロギーを国家全体のイデオロギーと見る傾向がある、(4)文化運動としての性格を有し、国家レベルでの政治文化の形成に重要な要素となる。

第3部では、第2部で明らかにされたポピュリズムの諸特性が地域の政治発展にいかんにか寄与しているかが理論的に考察されている。まず第2部の分析から1930年頃に生じた社会変動がポピュリズム運動成立の背景にあったことが明らかにされたが、著者は社会変動のみではポピュリズムの発生を説明しえず、社会変動が政治変動と時間的なずれを伴う場合にポピュリズムが発生すると主張している。このことは次のような例によって明らかにされるであろう。ラテン・アメリカでは工業化に先行して都市化が生じているが、社会的動員に伴って増大する都市人口は工業の立遅れから労働者階級として組織化されたり、統合化されることは少ない。一方、選挙権の拡大を通じて都市人口にも政治参加の機会が与えられる。つまり、「制度化・統合化・組織化は遅れていても……動員と参加は高水準に達している」(p. 176)。こうしたギャップを埋めるには、動員を抑制するか統合化を速めるしかないが、ポピュリズムは動員をスローダウンせずに、非

制度的手段——カリスマ的リーダーシップ、政治的後見、猟官制度——を通じて統合化をはかるものである。

とすれば、ポピュリズムが政治発展に果たす機能は、こうした非制度的手段がどのように政治的発展とかかわっているかを見ることによって知れるであろう。こうした視点から従来ともすれば否定的に解されがちであったポピュリズムの非制度的手段が実は政治発展に寄与しているという著者の独創的な見解が、第9～10章に展開されるのである。この場合、政治発展とは平等主義と参加の増大を意味するのであるが、ではポピュリズムの採る上記の3手段が、なぜ政治発展に資するというのか。それは、カリスマ的リーダーシップはアノミックな大衆に権威との一体感を与えることによって彼らの文化的参加を促し、政治的後見も、時として庇護される側の要求を助長し、ひいては追随者をリーダー(政府)と対等の地位にまで高め、政治的取引を可能たらしめうるからである。猟官制度もその非能率な面のみが強調される嫌いがあるが、実際には猟官制度による官職の授与が一部の人々の政治的動員と参加の度合を高めていることを無視すべきでない。要するに、ポピュリズムはそのナショナリスティックなイデオロギーのゆえに国民の同胞意識を高め、エリートと大衆の間にコミュニケーションのチャンネルを提供し、プラグマティックな政治的取引を可能にする、などの機能を果たしており、したがってポピュリズムを「牧歌的政治体制の持つ非合理的側面と見なすのは正当でも正確でもない」(p. 216)のである。こうして第2の問いに対しては肯定的な答が与えられ、ラテン・アメリカのポピュリズムはその政治的機能からみて高く評価されるのである。

#### IV

以上ごく大ざっぱに本書の内容を素描してみたが、最後に評者の感じた問題点を若干述べてみたい。

第1にポピュリズムの定義が不明確なことである。ポピュリズムの定義は困難な問題なので著者は意識的にそれを避けたのかとも思われるが、概念規定があいまいなために本書は結果的にポピュリズムと俗称される運動の分析にとどまっている。定義を明確化したならば、なぜラテン・アメリカでポピュリズム運動が発生するのかを理論的にも明らかにしえたであろうし、その政治的機能も一層の説得力をもって示されたのではあるまいか。

第2に、ポピュリズムの実例としてラテン・アメリカ

の6カ国があげられているが、なぜこの6国を選んだのかその基準が全く明らかにされていない。評者はメキシコの制度的革命党 (Partido Revolucionario Institucional, 略称PRI) もポピュリズムとして重視するのだが、本書では同党を実証分析から除外した理由について一言も触れていない。恣意的に6カ国が選ばれているとしたら、その実証分析に基づく一般化の試みも説得力を欠かざるをえないであろう。

第3にポピュリズムの諸側面がラテン・アメリカの政治発展に資しているという本書の主張は傾聴に値するものではあるが、その特徴として挙げられているもののい

くつか——カリスマ的リーダーシップ、政治的後見、親官制度など——は、ポピュリズムとは呼ばれてない体制にも見られることである。とすればこれらの特色からポピュリズムの貢献を論ずるのはいささか無理がある、のではなからうか。

こうした(さらにここでは触れえなかった他の)問題点をはらむにせよ、本書はラテン・アメリカのポピュリズムを総合的・理論的に扱った数少ない著作の一つであり、この分野での基本的文献に数えられるべきものである。

(南山大学講師 松下 洋)

アジア経済研究所刊行

宍戸 寿雄 編

タイ 経済 発展 の 諸 条件

双書212/A 5判/240頁/1800円

西欧化の努力は100年前に始められたのに、なぜ工業化に成功しなかったのか。農業国でありながら、なぜ地主制度が発生しなかったのか。豊富で良質な労働力を持ちながら、なぜ工業労働力として不相当といわれるのか等々を2年に亘る現地滞在の成果を踏まえて説明する。

山中 一郎 編

現代パキスタンの研究 (1947~1971)

双書213/A 5判/464頁/3000円

パキスタンにおける社会、政治と宗教、経済発展、経済と農業セクター、工業の展開過程の5種に亘る問題を分析。巻末に1947年の印・パ分離から71年のブット大統領就任にいたる「パキスタン小年表」を付す。新生パキスタンおよびバングラデシュの研究者必見。

林 利宗 編

インドネシアの金融事情

双書214/A 5判/315頁/2400円

インドネシアは、スハルト政権になって以来数年、ようやく金融正常化への第一歩を踏み出しつつあるとはいえ、今なお多くの困難な問題をかかえているのが現状である。本書は、2年間の共同研究に現地調査を加え、インドネシアの金融事情を明らかにする。

アジア経済出版会発売